

命の水枯れない

綾瀬の金子さん ベッドで詩画

肩から下が動かない障害を抱えながら、口にくわえた絵筆で花の絵と詩を描く綾瀬市寺尾本町の金子寿さん(51)の絵画展「命の水を詩画に」が市内で開かれている。東日本大震災の被災者を励まそうと描いた新作など26点を展示している。30日まで。

「あなたの 苦しみが 笑顔に変わり あなたの 悲しみが 幸せの花となり あなたの 寂しさが 沢山の愛で 包まれますように」――被災者を思い、ゼラニウムの花の絵にこの詩を添えた。

金子さんは、高校2年生だった1978年、体操部の練習中に鉄棒から落ちて

中央公民館で30日まで作品展



首の骨を折り、頸髄損傷で肩から下を動かせなくなつた。一命は取り留めたが、「一生車いすの生活」と知らされた。自殺を考えたが、手も足も動かせず、死ぬことすらできなかった。だが、同じ障害をもつ患者の励ましや、医師や看護師らの支えで、少しずつ前向きになった。



①ベッドの上で画用紙に向かう金子さんと智秋さん②綾瀬市寺尾本町③金子寿さんの作品を携帯で撮影する人④同市中央公民館のレストラン綾瀬

リハビリのため、口にくわえた筆で絵を描き始めた。「違うことをやってみたい」と一時は絵から遠ざかり、電動車いすでの陸上大会出場、福祉先進国のアメリカ視察、発展途上国に車いすを贈る活動などで積極的に社会とかかわった。

絵の再開は、2001年に結婚した智秋さん(50)との出会いがきっかけ。「誰かの手を借りないと生きていけない。感謝の気持ちを表したい」と絵に思いを込めた。二紀会所属の小林三夫さんの指導も受け、花の絵を描くようになった。

寝たきりだが、ベッドの背もたれ部分を起こし、オーバーテーブルに立てた画用紙に向かう。鉛筆で下書きし、色を塗るときは、智秋さんに絵の具を筆に付けてもらう。最後に黒い絵の具で自作の詩を書く。「私には毎日 水を与えてくれる 優しい人がいるから 私は枯れない 沢山の感謝を あなたに伝えたい」。絵画展に合わせ、ガーベラの花の絵に書き添えた。

絵画展の会場は中央公民館の「レストラン綾瀬」。小林さんや絵画仲間の作品も展示している。入場無料。午前11時から午後3時30分まで。最終日は午後2時まで。火曜と第3水曜は休み。問い合わせは金子さん(0467・79・3325)。(柳沼広幸)